

「地域の日本語教室」に「漢字」は必要か —あるボランティアの事例から—

福島 育子・濱川 祐紀代

1. はじめに

日本社会では漢字を避けて生活することは不可能に近いともいえるが、外国から来て地域で生活する人たち、とりわけ「地域で生活を営み、かつ学校に通う機会を持たない学習者」(以下、「地域の生活者」)はどのように対処しているのだろうか。そこで、本稿では、「地域の日本語教室」の活動に着目し、ある「地域の日本語教室」で活動するボランティアにインタビュー調査を行った。その結果からボランティア、学習者の「漢字」に関する意識を明らかにするとともに、「地域の生活者」のニーズにいかに対応していくかについて考察する。

キーワード：地域の日本語教室、ボランティア、漢字、地域の生活者、生活日本語

1.1 地域の日本語教室とは

1970年代以降、日本経済の国際化に伴う外国人労働者受け入れや国際結婚などによって、ニューカマー(1)が増加したが、その多くは、経済的・時間的理由などから日本語学習の機会がほとんどなく、生活に困難が伴ったと言われている。そこで地域社会では「ボランティア」による日本語学習支援活動が行なわれるようになった。地域社会でのこうした活動は、主としてその地域に住んでいる「日本語を母語としている人(多くは日本人)」と「日本語を母語としていない人(多くは外国から来た人)」の参加によって成立(山田,2003)している。これらの活動の場は「地域の日本語教室」「日本語教室」「ボランティア教室」などと呼ばれている。

こうしたボランティアによる地域の日本語教室には多様な背景を持つ学習者が集い、共に交流しながら学んでいる。そのため、学習者のニーズや学習スタイルも様々である。したがって、体系立てた教育を行なう学校とは異なり、より生活に密着した場所であるといえる。それゆえ個々の学習者の生活相

談や支援などを行うことも多い。その都度、各学習者が「明日生きていくのに必要な日本語と、日本社会の中で生きていくために必要なことを学ぶ」(日本語フォーラム全国ネット,2004)場所であり、学校のようなカリキュラムではなく、その日の学習者(特に来日・来室まもない学習者など)の状態に合わせて学習内容を考える場合が多いようである。

また、その役割について、田中(1996)はボランティアと学習者の関係に着目し、「教える側」と「教えられる側」といった固定的な力関係ではない、新しいかたちの日本語教育(2)の必要性を早くから指摘している。これを受けて足立(2006)は「地域の日本語教室の役割は、すでにその地域に住んでいる教室参加者(教授者)たちが、新しく来て日本社会に慣れていない人々を受け入れ、寄り添いあいながら協調的コミュニケーションをとりあう場を提供することである。」と述べている。特に近年は、「学習者」と「ボランティア」が双方向的に学びあう「共育」関係(野山,2002)を構築していくことが提唱され、互いに交流し理解を深めつつ学ぶ場としての機能も重要視されている(山田,2001)。また、杉澤(2005)は「地域の日本語教室は、日本の多文化共生社会の土台を構築し得る市民活動」であると主張している。

1.2 地域の生活者とは

教室だけでなく、学習者もまた多様である。観光などの目的で来日する短期滞在者から、ビジネスマンやその家族、中国帰国者とその家族や親族、就学生や留学生、ワーキングホリデービザ取得者、「日本人の配偶者等」などさまざまな背景を持つ外国人が教室に混在している。それによってそのニーズも実に多岐にわたっている。その中でも、本事例では、地域で生活を営み、かつ学校に通う機会を持たない学習者、すなわち「地域の生活者」に注目した。日常生活のさまざまな場面では、各自の日本語能力にかかわらず、漢字の読み書きを含めて必然

的に日本語使用を求められる。しかし、それにもかかわらず、学習の機会には恵まれていないのが現状だと考えられるからである。

1.3 「生活日本語」とは

1981年、文化庁は中国からの帰国者を対象にした日本語教育に関する研究に着手したが、「生活日本語」は、『中国からの帰国者のための生活日本語Ⅰ・Ⅱ』という教材を開発する中で生まれた。文化庁(1981)では、「生活日本語」を、「来日間もない外国人が日本で生活するために必要な日常の場面の中の日本語」、「直ちに日本の生活を開始しなければならない外国人に対し、その生活適応の円滑化に役立つ基礎日本語」、「生活習慣の違いに十分な配慮を加えたもの」と定義している。つまり、「直ちに生活に直結させて利用できる実際的な日本語」(文化庁委嘱,1982)であり、日常生活を送る際に必要な基本表現や語彙であるといえよう。

2. 調査

2.1 調査概要

方法：インタビュー調査

(独和形式で適宜質問を加える)

インタビューテーマ：

「ボランティアによる、ある日本語教室の活動内容と漢字指導の実態について」

目的：ある「地域の日本語教室」における漢字指導および(学習者の)漢字学習の現状把握。

学習者・ボランティア両者の漢字に関する意識について考察すること。

調査協力者：ある「地域の日本語教室」で長年活動しているボランティア

3. 結果

3.1 ボランティアによる漢字指導の現状

ボランティアを対象としたインタビュー調査の結果、本事例の地域の日本語教室における漢字指導に関して、以下のような現状が報告された。

- ①この地域の日本語教室では、漢字を主とした指導の時間があまりない。日常生活の不便性から学習者によっては漢字学習を希望。
- ②漢字教材を紹介してほしいと言われることがある。
- ③幼稚園や学校からの配布物を持参し、「読んでほしい・説明してほしい」と言われ説明することはあるが、現時点では教室で漢字学習をサポートするこ

とができていない。

3.2 学習者による漢字学習の現状

学習者による漢字学習についてもボランティアのインタビュー調査からうかがい知ることが出来た。

- ①ドリル教材などを自分で購入し自主的に漢字学習を始める学習者もいる。
- ②教室参加時点での学習者の日本語能力にもよるが、日常生活に密着している漢字(たとえば「～駅」「出口」「野菜・肉」など)は必要に迫られ学習している場合がある。
- ③学校からの配布物や提出物・飲み菓の説明や保健所などの案内を教室に持ち込み、ボランティアに説明や記入などを求めることがある。

4. 考察

この「地域の日本語教室」では参加者数が流動的なだけでなく、学習者のニーズに対応するため、学習内容も流動的にならざるを得ないこと、またそこでは、その日に必要な生活日本語の指導がなされる一方、一貫した、あるいは体系的な学習が困難であることが、ボランティアへのインタビューから明らかになった。つまり、本事例の日本語教室においては、たとえば、読み書きに限って考えると、各種情報(学校のお知らせや広報など)や提出書類の説明など、今日明日に必要なことの支援はしているものの、単発で終わることも多く、これを機に漢字の習得まで指導しているわけではないようである。

4.1 「地域の日本語教室」における「漢字」に関する意識

本調査では、調査者は「ボランティアによる日本語教室の活動内容と漢字指導の実態について伺いたい」と依頼し、調査協力者が独話形式で現状を語るというスタイルをとった。調査協力者が所属している日本語教室の現状(活動内容・指導内容・教室の様子・学習者の様子など)について語ってもらったが、途中、調査者から適宜質問を加え、全体で5時間弱を要した。しかしその中には、「漢字・文字表記」に関する発言がほとんどなかった。インタビューの最後にインタビュアーからの質問によって、漢字に関する発言を得ることが出来たのだが、それによってボランティアの意識をうかがい知ることができた。「教室では生活に必要な日本語学習が必要だ」と考えており、ボランティアの意識の中で「漢字(や文字)」はかなり奥深いところにうもれてい

ることが分かった。

自主的に漢字学習を始める学習者もいるが、ボランティアはその理由を「日本社会には漢字があふれ、漢字なくしては生活に困難な点があるからかもしれない」と推測している。しかし、このことは自発的に出たコメントではなく、インタビューからの指摘によってもたらされた「気づき」である。さらにボランティアは「漢字指導は必要だと分かっているが“生活日本語”が優先であり、漢字に割く時間がない」とも言っている。しかし実際に「生活日本語とは何か」と振り返って考えることはなく、経験に基づいて活動を進めているようである。つまり、ボランティア（漢字指導）と学習者（漢字学習）の間には、「漢字」に関して明らかに温度差があるといえる。

また、ボランティアは日本語教室で漢字を扱うことが少ない理由として以下の点を挙げている。

- ①生活会話の習得に追われ漢字学習の必要性を感じながらも手がまわらない。
- ②教室での学習時間に漢字学習を入れる時間的な余裕がない。
- ③漢字学習は個別に行うものであり、教室での共有の時間に行うには無理がある。

ボランティアは「学習者が各自工夫して学習を進めている」という事実を知りながら、ほとんどケアしていないということは注目すべき点である。ここにはどのような問題が潜んでいるのか。「地域の日本語教室」だからこそこできる対応があるのではないだろうか。

5. おわりに

以上で見てきたように、ボランティアと学習者（地域の生活者）との間に、「漢字」に関して明らかに温度差が見られた。学習者のニーズに応えるのであれば、この温度差は解消されるべきだが、それはいかにして可能であろうか。上述した問題点とあわせて考察しておきたい。

生活者である学習者、すなわち「地域の生活者」が日本で生活する際、その「生活日本語」には「文字（漢字）」が大きく関係してくるはずである。調査協力者であるこのボランティアは、地域の日本語教室における日本語支援（生活支援などを含む）について、「この調査を通じて、生活には「漢字」が必要であることを意識しながらも、学習機会が極

端に少ない、ということに気づいた。」とコメントしている。また、インタビュアーは、「頭の隅では時に漢字学習の必要性を感じつつも、どうしたらいいのかわからない、あるいは時として単発で漢字を扱ったとしても、興味のある学習者には自習してもらうしかない」というボランティアの発言から、ボランティア自身が回避の傾向にあることを感じとっている。そこで、インタビュアーは、「学習機会が極端に少ないというよりは、むしろ避けているのではないか。ボランティアに“生活にすぐ使える会話を扱うべきだ”という意識が働き、このような結果を導いたとも考えられる」とフィードバックしている。

ボランティア自身も「教室での漢字学習が必要だ」と考えているのであれば、週に数文字程度の指導/学習は可能であろう。にもかかわらず行っていないのは、やはりなんらかの理由があるはずである。その原因の一つとして、生活に必要な「漢字・漢字を使ったことば」にはどのようなものがあるのか、注目度が不足していることが考えられる。つまり、「地域の生活者」である学習者が日常生活の中で必要とする漢字とは何か、そのニーズを真に理解していないのではないか。また、それによって学習者に適確なアドバイスができないとも考えられるのである。さらにボランティア自身の学習経験から「漢字学習には自律（個別）的・継続的努力が必要である」という思い込みがあり、教室で積極的な取り組みが出来ないばかりか、学習者にも無意識の内にその思いが伝わっているとも考えられよう。いずれにしても、「学習者が漢字学習を必要としている」ということを知りながらそれに適切な対応ができずにいるのは、ボランティア自身がどのように漢字指導および漢字学習支援をすべきか、適切な方法が分からないところにその原因があると考ええる。

それでは、「地域の日本語教室における生活日本語支援」という枠組みの中で必要となる「漢字学習の項目」とは何か。おそらくそれは学校教材としての枠組みでは捉えられないものであろう。つまり、「生活」そのものが「基準」だからである。インタビューの中で、ボランティアから具体的な事例はほとんど出てきていない。ボランティアは「学習者の必要な生活日本語を教えよう」と試みているにもかかわらず、学習者に必要な生活場面を具体的には把握できていないとも考えられるのである。

以上のことから、まずボランティア自身が、「地域の生活者」が必要とする「生活言語」(3)とは何か、また実生活上の漢字にはどのようなものがあるのか、具体的に知る必要があることがわかる。そのためにもボランティアは自身の活動を振り返り、学習者と対話し、その声に耳を傾けることが大切である。つまり、ここで考察された「気づき」をボランティアは周囲(学習者や他のボランティア)と共有するとともに、学習者が生活のために必要な漢字を学習する際、まずボランティア自身が適確に対応できるような学びが必要であろう。先行地域では漢字学習・指導に特化した教室も誕生しているが、上記のような学びと実践が地域の生活者のニーズに答えることに繋がっていくものと考えられる。

今後の課題としては、上記のような気づきや学びを周囲といかに共有していくか、またそうした実践が教室でどのように展開され、地域の日本語教室における「漢字」のあり方にどのような変容が見られるのか、さらに探究していきたい。

注

1. 高見澤(1997)では「日本経済の国際化に伴って1970年代以降、新たに日本に來住した外国人(新來外国人)」としている。
2. 「外国人は自然習得のかたちで日本語を身につけ、日本人側は教えるのではなく、コミュニケーションに参加していくという、新しいかたちの、日本語を教ええない日本語教育を創造していかなければならない。」
3. 本稿では、「生活言語」とは、日本で生活するのに必要な言語及び知識と定義する。会話のみならず、漢字・平仮名・カタカナ、また各国語の表記なども含まれる。また、様々なフォントの違いや標識・マークの意味なども含む。

参考文献

- 足立祐子他(2006)「地域の日本語教室とその役割」『日本語教育の新たな文脈—学習環境、接触場面、コミュニケーションの多様性—』アルク pp.103-118
- 池上重弘(2001)『ブラジル人と国際化する地域社会—居住・教育・医療』明石書店
- 岡崎洋三・西口光一・山田泉(2003)『人間主義の日本語教育』凡人社
- 高見澤孟監修(1997)『はじめての日本語教育〔基本用語事典〕』アスク, p.215
- 田中望(1996)「地域社会における日本語教育」『日本語教育・異文化間コミュニケーション—教室・ホームステイ・地域を結ぶもの—』凡人社, pp.23-27
- 日本語フォーラム全国ネット(2004)『日本語フォーラム2004 in 東京 記録集』, p.98
- 野山広(2002)「地域社会におけるさまざまな日本語支援活動の展開」『日本語学2002年5月号』明治書院
- 濱川祐紀代(2006)「生活の中の漢字を探せ!」『月刊日本語12月号』p.13
- 文化庁(1982)『初心者用日本語教材の開発に関する実際研究』文化庁日本語教育研究委嘱 p.1
- 文化庁文化部国語課編(1983)『中国からの帰国者のための生活日本語I・II』
- 町屋日本語教室編(2003)『生活漢字306(英語・タガログ語版)』
- 武蔵野市国際交流協会(MIA)漢字グループ(2006)『月刊日本語12月号』pp.22-27
- むさしの参加型学習実践研究会(2005)『やってみよう「参加型学習」!日本語教室のための4つの手法〜理念と実践〜』スリーネットワーク pp.9
- 武蔵野市地域日本語教育推進委員会(2000)『武蔵野市地域日本語教育推進事業報告書〜市民活動としての日本語「共有」の試み〜』
- 山田泉(2001)「社会を変えるための「学び」-学ぶのはだれか-」『東海日本語ネットワーク活動報告書第6号』東海日本語ネットワーク, pp.7-211..

ふくしま いくこ / 帝京平成大学留学生別科非常勤講師

ikfuk@nifty.com

はまかわ ゆきよ / 桜美林大学非常勤講師

yukiyo@obirin.ac.jp